

# 尾道商業会議所記念館 第28回企画展示解説

2015年10月16日～2016年1月13日

テーマ 尾道あ・ら・かると  
郷土写真家が記録した尾道の産業～造船と塩田～

歴史ある尾道の産業の一つである造船と、時代と共に今日では跡形も無く消失した塩田 - 海に寄り添う尾道らしいその二つの産業に、愛機のファインダーを向け、写真に記録し続けた一人の郷土写真家がいた。

土本壽美(つちもと・かずみ)。1925(大正14)年、御調郡向島西村(現・尾道市向島町)の農家の長男として生まれた。彼の写真人生は筋金入りの年季である。小学校時代、修学旅行先の奈良で、同級生と先生達の記念写真を撮ったのが最初の出会い。

日立造船向島工場の前身となる向島船渠において、木型工として勤める傍ら、本格的に写真を撮り始めた。戦時中は召集令状を受けて戦地に赴いたが、戦後復員後は再び日立造船へ戻り、在職後半期には広報係へ配属され、新造船や進水式など、造船関係の記録・記念写真を数多く撮り続けた。

造船に限らず、故郷向島及び尾道の風景にもファインダーは向けられ、戦前・戦中・戦後、モノクロからカラーにわたる膨大な写真が、ここに遺されることになった。それらのアーカイブは、この街の歩み、移り変わりをビジュアルで迎える貴重な記録資料であり、小さな「尾道遺産」でもある。

土本壽美写真アーカイブの中でも、土本氏本人が最も思い入れのあった造船と、地元向島の風景として親しんだ塩田をピックアップし、近代尾道の産業史の一面を写真で振り返ってみたいと思います。



故・土本壽美氏 左は30歳の時(昭和30年) 右は晩年期(平成16年)

## 尾道の造船年表

西暦	元号	事柄
1896	明治29	土生船渠合資会社設立。2000トン石造乾船渠つくる。翌年3500トン石造乾船渠完成。
1898	明治31	尾道市誕生
1902	明治35	備後船渠株式会社竣工
1903	明治36	土生船渠合資会社、因島船渠株式会社に改組。
1904	明治37	日露戦争勃発
1905	明治38	ポーツマス講和条約締結。海運不況始まる
1906	明治39	船舶建造、修理業の松場鉄工所創業
1908	明治41	因島船渠株式会社工場閉鎖
1911	明治44	大阪鉄工所、因島船渠株式会社買収。因島工場として操業開始 不況脱出
1913	大正2	船舶修理業の水野船渠造船所創業
1896	大正3	大阪鉄工所を改組して、株式会社大阪鉄工所因島工場となる
1896	大正4	山陽造船所設立

1914	大正6	株式会社大阪鉄工所、備後船渠の経営に乗り出す 船舶建造、修理業の尾道船渠造船所、株式会社に改組
1918	大正7	船舶建造、修理業の株式会社向島造船所創業 第一次世界大戦終結 水野船渠造船所、向島船渠株式会社に改組 備後船渠、株式会社大阪鉄工所備後工場となる
1920	大正9	株式会社大阪鉄工所、備後工場を因島工場に合併 戦後不況
1922	大正11	株式会社大阪鉄工所備後工場、株式会社大阪鉄工所三庄工場となる
1926	大正15	株式会社大阪鉄工所因島工場、修繕船工場となる
1929	昭和4	船舶建造、修理、汽缶製造業の杉原鉄工所創業 大阪鉄工所、向島船渠株式会社の経営に参画
1930	昭和5	発動機、船具製造業の須田鉄工所創業 世界大恐慌
1934	昭和9	鉄工業の立花鉄工所創業
1939	昭和14	第二次世界大戦勃発
1940	昭和15	杉原鉄工所、株式会社杉原鉄工所に改組 瀬戸田船渠株式会社創立
1941	昭和16	太平洋戦争突入
1942	昭和17	「重要産業団体令」に基づき「造船統制会」設置 戦時統制により株式会社杉原鉄工所、株式会社日産造船所に合併
1943	昭和18	大阪鉄工所、日立造船株式会社に社名変更。向島工場操業開始 尾道造船株式会社創設
1944	昭和19	瀬戸田造船株式会社設立
1945	昭和20	因島大空襲で工場設備焼失損壊 第二次世界大戦終結 日立造船株式会社向島工場、損傷船の修理と建造中の戦時標準船の建造許可
1946	昭和21	日立造船株式会社向島工場、民需転換承認 尾道造船株式会社、新造船に進出
1950	昭和25	朝鮮戦争勃発。特需により好況。輸出タンカーブーム到来 株式会社日産造船所倒産 杉原造船所再建 向島町誕生
1952	昭和27	因島市誕生
1953	昭和28	朝鮮戦争終結。不況到来 杉原造船所、向島船渠株式会社に改組
1954	昭和29	政府が実施した輸出助成により第一次輸出船ブーム迎える 山陽造船創業
1955	昭和30	高度経済成長期始まる
1957	昭和32	第二次中東戦争(スエズ動乱)勃発、第一次輸出船ブーム終了。造船不況始まる。
1962	昭和37	第二次輸出船ブーム到来
1964	昭和39	第二次輸出船ブーム終結 山陽造船、株式会社山陽造船に改組
1965	昭和40	第三次輸出船ブーム到来
1967	昭和42	瀬戸田造船、日立造船系列下に入る 日立造船株式会社因島工場、新水量500万トン突破、記念祝賀会挙行
1970	昭和45	第三次輸出船ブーム終結
1972	昭和47	瀬戸田造船株式会社と田熊造船株式会社が合併し、内海造船株式会社発足。
1973	昭和48	石油危機、造船不況到来 立花鉄工所、工場閉鎖
1983	昭和58	因島大橋開通
1991	平成3	生口橋開通
1992	平成4	向島船渠株式会社、向島ドック株式会社に改称
1999	平成11	因島市内の事業者、事業組合、関係団体で「因島技術センター」設立 瀬戸内しまなみ海道開通
2002	平成14	ユニバーサル造船株式会社創立。日本鋼管株式会社、日立造船株式会社から船舶部門の営業譲渡を受け、操業開始
2005	平成17	尾道市、御調町・向島町と合併
2006	平成18	尾道市、因島市・瀬戸田町と合併

## 造船に沸いたまち

1943(昭和18)年、日立造船向島西工場が操業を開始してからは、日立造船向島工場は、修繕船の受入を行った。その中には、ニッスイ(日本水産)の捕鯨船の修繕も数多く行われており、南水洋で約5ヶ月の航海を終えたキャッチャーボートや捕鯨母船が入渠し、まさに日本水産捕鯨船団の母港であった。

修繕の場合、約40日から50日の短期間で行われるため、乗組員が造船所近くへ滞在した。日立造船では、乗組員が宿泊できる寮を備えていたが、家族の訪問に備えて、向東町を中心に民宿ができた。乗組員たちが持ち帰った冷凍の鯨肉が土産として知り合いに配られたそうである。

商業捕鯨も鯨の減少とともにない1982(昭和57)年の国際捕鯨委員会による商業捕鯨停止により、1986(昭和61)年には南水洋、1988(昭和63)年には北太平洋の母船式捕鯨が終わりをつげた。

遠洋を航海する船は、みな食料を大量に積み込んで船出した。尾道の商人にとって、船の食料、いわゆる船食を船に積み込めれば大きなビジネスチャンスとなった。そのためのサービスもいろいろと考え出された。家が遠方の乗組員のために家族への荷物の配送や家族が訪ねて来た際の宿の確保などもそのひとつであった。そのうち、尾道市向東町にも民宿がたち並んだ。船食のサービスから発展したということである。

また、造船所は、顧客の船会社のために賓客用の宿を定めたり、自前の宿所を設けたりした。



日立造船向島工場に寄港したキャッチャーボート  
※昭和38年撮影

## 尾道と塩田

商都尾道の隆盛のひとつに塩の流通があげられる。

瀬戸内地方では、瀬戸内海の干満の差や雨の少ない瀬戸内海式気候によって塩田が各地に開発された。日本随一の塩田地帯であった。

芸備地方で塩田開発が始まったのは、広島藩では、竹原古塩田で、1650(慶安3)年から、福山藩では、1662(寛文2)年に松永塩田の開発が手始めとなった。

竹原・松永塩田の開発は、広島藩や福山藩の主導で開発が行われたが、塩の領内消費から都市の発展に伴う需要が拡大していった。さらに、1672(寛文12)年に河村瑞賢によって開発された西廻り航路によって、塩が有力な商品となっていった。

豪商たちは、競って塩田開発に取り組むこととなった。尾道は、備後国大田荘の年貢米積出の公認港として港湾都市の発展が始まるが、歌島(向島)や生口島などの島しょ部からの物産を扱うことによって大きく発展したといえる。その基幹物品が塩だったのである。

尾道地方の塩田を並べてみると、富浜塩田(尾道市向島町)、栗原塩田(尾道市天満町付近)、吉和塩田(尾道市新浜付近～正徳町・福地町付近)、生口塩田(尾道市瀬戸田町)がある。



富浜塩田の風景  
※昭和28年撮影



塩田の砂を掻き起す浜子  
※昭和28年撮影



富浜24番浜の浜起し作業  
※昭和28年撮影



手引を持って塩田に入る浜子達  
※昭和28年撮影

## 尾道地方の塩田開発の年代

藩別	浜名	軒数	開発年代
福山藩	山波(尾道市山波町)	1	1698(元禄11)年
	浦崎(尾道市浦崎町)	2	1715(正徳5)年
広島藩	生口古浜(尾道市瀬戸田町)	30	1670(寛文10)年~1683(天和3)年
	富浜古浜(尾道市向島町)	11	1677(延宝5)年
	栗原沖(尾道市天満町付近)	4	1688(元禄元)年
	肥浜(尾道市向東町)	8	1689(元禄2)年
	生口新浜(尾道市瀬戸田町)	7	1690(元禄3)年~1696(元禄9)年
	富浜新浜(尾道市向島町)	14	1691(元禄4)年
	天女浜(尾道市向東町)	11	1692(元禄5)年
	吉和古浜(尾道市古浜町付近)	8	1696(元禄9)年
	津部田浜(尾道市向島町)	2	1697(元禄10)年
	吉和新浜(尾道市新浜付近)	9	1703(元禄16)年
小肥浜(尾道市向東町)	2	1730(享保15)年	

## 1825(文政8)年の塩田別生産高

浜名	軒数	生産高(5斗1升俵)
肥浜(尾道市向東町)	21	7万俵
富浜(尾道市向島町)	29	9万俵
吉和浜(尾道市新浜付近~正徳町、福地町付近)	21	7万俵
生口浜(尾道市瀬戸田町)	36	18万俵

※5斗1升=約76.5kg